

水事業の海外展開、日本が果たせる役割はたくさんある

【取材協力者】

水谷 重夫氏

水ing(株) 代表取締役社長

学生連載「学生が知りたい! 土木人の心意気」(全5回)第4回では、海外水事業に積極的に取り組む水ing(株)の水谷重夫社長と鈴木啓司氏に、心意気を伺った。世界の人口増加や経済成長に伴って拡大する水ビジネス市場。海外水メジャーに遅れをとる日本で、その開拓を先駆的に行う水ing(株)の原動力や、海外水事業で活躍するエンジニアの気概は何か――。

――海外水事業の現状について教えてください。

水谷 ――日本はこれまで、主に開発途上国を対象にODAを供与してきました。しかし、1990年代半ばになると、水事業施設の一部を民間に譲渡して運用する民営化がアジアの首都や南米で起こり、日本の援助によって建設された施設でありながら、水事業民営化の先進国であるフランスやイギリスの会社が運営を行うようになりました。というのも、日本には民間を主体とした水事業運営会社がなく、経験の乏しさから事業に参入できなかつたからです。世界のビジネスの動きを見るとフランス、イギリスの水メジャーが台頭し、そ

れを迫るように、アメリカ、ドイツの総合電機メーカーが水事業に進出してきました。また、スペイン、シンガポール、韓国といった先進国では、

えてください。

国家戦略として水事業会社育成を推進し、ゼネコンの事業多角化による水事業参入など、官民連携による進出が促進されてきました。一方で、日本には国家水戦略がまだなく、水事業の管轄省庁も上水道や下水道などで事業ごとに分かれており、日本がいくら進んだ優れた技術を持っていても水事業の民営化が進んでいないことがネックとなり、海外展開に遅れをとっています。――このような状況において、積極的に海外水事業に乗り出す思いを教

水谷 ――アジアの国々の水インフラ

育成に、健全な水事業という意味で貢献できる国は、日本だけだと考えています。たとえば、ジャカルタの水道は日本の援助でつくられたのですが、民営化の流れで東地区はイギリス企業、西地区はフランス企業に運営権が売却されました。しかし、結果として、両社とも儲からないという理由で撤退してしまつたのです。ODA資金で建設するだけという時代から運営まで携わる時代に変わらなから、それに対応できる会社があるのではなく、優れた日本の水処理技術を活かせませんでした。そこで、荏原製作所の水処理エンジニアリン

MIZUTANI Shigeo

1955年東京都出身。1980年慶応義塾大学工学科卒業後、三菱商事入社。国内外の水・環境事業に従事し、2010年4月荏原エンジニアリングサービス(現 水ing)代表取締役副社長、2013年4月同社代表取締役社長就任、現職。



鈴木 啓司氏

水ing(株) 海外事業本部
プロジェクト統括海外工事管理室 室長

SUZUKI Hiroshi

1967年大阪府出身。1991年関西大学土木工学科卒業。鴻池組で国内・海外の建設工事を担当後、2002年荏原グループ会社(現 水ing)に転職。主にベトナム等東南アジアやアフリカ地域の水処理施設建設工事の担当を経て現職。



グ子会社であった荏原エンジニアリングサービス(現 水ing)に三菱商事と日揮が資本参加し、総合水事業会社として新たにスタートしました。海外の先進事例をみると、海外水事業に参入する前にベースとなる官民連携水事業会社を国内で築いています。日本ですべてをやっていく間に合いません。そこで、当社は、三菱商事や日揮の海外ネットワークやマネジメント力を活かし、国内と並行して、海外水事業に進出することにしました。当社はすでに50ヶ国、500ヶ所以上の海外納入実績があり、また要素技術や基礎技術のベースは保有しているので、官が持つ、さまざまな水事業運営ノウハウを融合



写真1 2013年8月 コンゴ民主共和国 キャサリン市 ンガリエマ浄水場にて



写真2 2013年6月 ベトナム ホーチミン 下水処理場建設事務所にてローカルスタッフと

すれば、必ず海外の水インフラ普及のお役に立てると思います。その信念のもと、技術の輸出だけであった状況を見直して現地化を進め、官民連携で事業に参画するまでのビジネスモデルへ転換を図っているところ です。

—— 水事業の海外展開においてエンジニアが果たす役割は何だと思えますか。

鈴木——日本の高度な技術やノウハウを提供することで、日本の水インフラ輸出に貢献することだと思えます。

また、仕様書だけにとらわれず、お客様のニーズに合致した施設を納入することです。

日本での仕事は要求事項や仕様がある程度定まっていますが、海外では案件ごとに顧客のニーズも現地の環境もまったく違います。お客様とよくコミュニケーションを図ってニーズを汲み取り、それに合わせて提案・対応し、しっかりと納める、これはエンジニアとして非常に重要な役割でしょう。

水谷——水処理施設を自然災害から守ることも重要な役割です。東日本

大震災では、当社が指定管理者として管理している下水処理場が壊滅的な被害を受けましたが、地震発生直後から社員が現場に張り付き、自治体、関係者と協力して、6年かかるといわれた施設を2年半で復旧しました。ただ施設を納めるだけではなく、不測の事態が発生したときの対応能力もエンジニアとして求められる重要な役割です。また役に立てると言うことは、技術者冥利に尽きると思っています。

—— 仕事をするうえでのごだわりやモチベーションを教えてください。また、学生へのメッセージをお願いします。

鈴木——インフラ整備は、完成したときにお客様や地元の人が大変喜んでくれるのが励みになり、遣り甲斐を感じます。特に、まったく何もないところに水道施設を納入し、蛇口から綺麗な水が出た瞬間の人びとの反応の大きさが違いますね。

私は、学生の皆さんに海外に出ることをおすすめします。異文化交流や多様な人びとと接することで人生観が大きく変わり、自分を磨くことができますし、私自身は人生の修行

の場だと思っています。ぜひ、若い人にも同じ経験をしていただきたいと思っています。また、水事業の案件全体に占める土木建築の比率は高く、活躍の場がたくさんありますので、ぜひ当社に興味を持っていただければと思います。

水谷——仕事をするうえで最も大切なことはお客様の信頼を裏切らないことです。30年前に一緒に仕事をした海外のお客様とは、今でも良きパートナーです。

私のモチベーションの源は、水そのものが人類に不可欠であり、その仕事に携わっていることに誇りを持ち、水 in g で働いていることです。また、仕事を愛し、社員を愛し、国やその土地を愛すること、これは重要だと思って実行してきました。

世界では、10億人が飲み水に困り、30億人は下水道がない不衛生な環境で生活しているという状況のなか、日本が果たせる役割はたくさんあります。ぜひ、この仕事に参加してください。学生を増やし、この水事業を脚光の浴びる仕事にしていきたいと思えます。

(担当編集委員…飯島怜、寺嶋茂樹)